平成27年度　第１回北九州市子ども読書活動推進会議　会議録（要旨）

１　日　　時　　平成27年8月17日（月）　　10:00～12:00

２　場　　所　　北九州市立生涯学習総合センター　３階ホール

３　出 席 者　　〔委　員〕　山元悦子委員（会長）他１３名
　　〔事務局〕　垣迫教育長　他２５名

４　議題、議事の概要
（１）　教育長あいさつ
（２）　会長、副会長選出
（３）　議題
ア　「北九州市子ども読書活動推進会議」について
イ　「北九州市子ども読書プラン」進捗状況について
ウ　次期「北九州市子ども読書プラン」について
エ　「北九州市子ども読書プランに関するアンケート」結果報告
オ　今後の子どもの読書活動の取組みについて（意見交換）

５　主な質議応答、意見

議題：「北九州市子ども読書活動推進会議」について

質議、意見なし

議題：「北九州市子ども読書プラン」進捗状況について

委　員／　進捗評価で、「順調に推移」や「改善・努力が必要」などは、どのような基準で判断しているのか。目標の何パーセントなど数値があるのか。

事務局／　何パーセントという数値は定めてはいない。プランの策定時に比べて、目標に随分近づき、目標達成の見込みがありそうであれば「順調」としている。

委　員／　ブックスタート事業における、未受領者の意向確認のためのアンケートというのは、どのようなものか。

事務局／　毎月、出生児の方にはがきを送り、はがきを持って、市民の方に図書館等の各配布場所に来ていただき、ブックスタートという形で絵本を配布している。平成26年度の配付率は67.1％である。30～40％の方が来られない状況であるので、何故来られないかというアンケート調査を行った。取りに来られた方は、家庭の中でも読み聞かせ等を継続してやっているというご意見もいただいたが、取りに来られない方だと、「配布場所が近くにない」、「取りにいくのが面倒くさい」などの意見をいただいた。平成27年度からは、市立幼稚園など配布場所を増やし、アンケート結果に基づいた対応を行っている。

委　員／　とてもいい取組みだと思うが、取組み自体を知らない保護者の方もたくさんいらっしゃるようなので、例えば産婦人科の先生たちとか、そういう方からの配布を検討してもよいのではないか。

事務局／　例えば、「のびのび赤ちゃん訪問事業」など様々な機会を利用してチラシを配布しているが、ブックスタート事業の配布率を高めたいので、配布方法を変更しながら、より多くの方へ、ほぼ皆さんに絵本を配布したいと考えている。

委　員／　小中学校の学校図書館の常時開館を目指しているという取組みについて、常時開館が小学校 130 校、中学校 61 校という結果が出ている。私自身もブックヘルパーとして、常時開館に参加をしているが、実際は、ブックヘルパー頼みのようなので、もう少し踏み込んで何かプランを考えたほうがいいのではないか。

事務局／　常時開館については、平成 22 年度から学校図書館職員、いわゆる学校司書を配置する事業をモデル事業という形で開始し、昨年度、平成 26 年度までに、全ての学校に一通り一度は配置するという形で、順次拡充を行った。それに伴い、学校図書館職員を配置した学校には、保護者や地域の方から、ブックヘルパーを募集し、配置していき、常時開館する学校を増やすことができた。

　ただ、一度配置して、不在となった学校については、学校が主体となりブックヘルパーのお手伝いをいただきながら、常時開館を継続する努力をしているところである。今後も、モデル事業を続けながら、図書館環境の充実や、常時開館を継続していくための検討も継続していく。

委　員／　「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日の推進」について、啓発用のしおりや保育園内の掲示物をいただいたが、まだまだ知らない保護者も多く、保育園自体もどうやってこれを推進していくのか、啓発に結びついていないように思う。例えば、出前講演などの取組みはあるのか。

事務局／　「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」については、今回のアンケートでも、小学生ではある程度行き渡っているが、中学生や未就学児で実践が少ない、未就学児については、「知らない」という回答が出ているところである。これは今回、この啓発をどうするかということを１つの課題と受け止めている。

　「子どもを育てる１０か条」の出前講演等でも一緒に啓発を行っているが、抜本的、決定的なものがなかなかないところである。

　委員にご意見をいただき、次期のプランで何か実効性の高まるような取組みをぜひ検討していきたいと考えている。

委　員／　「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」については、学校現場にいる者として大変反省している点がある。学校関係者がその気になって、保護者や、地域の方に呼び掛けていくということが、とても大きな影響力になるかと思う。

　実は北九州市には、北九州市立学校図書館協議会というのがあり、７区の校長会で学校１名、それから教頭会で、学校１名で組織されている。その組織でこういった施策を、各区に呼びかけをしていくなどうまく活用していき、啓発につなげないかと思っている。

委　員／　子どもたちの読書の時間を奪っているのは、テレビとゲームとスマホだと思う。小さいときからこういうツールに慣れ親しんで、なかなか本に向かないということもあるため、本当に本気で取り組まないといけない大事なことだと思う。

議題：次期「北九州市子ども読書プラン」について

　質議、意見なし

議題：「北九州市子ども読書プランに関するアンケート」結果報告

委　員／　このアンケート報告書には、数値に関するもの以外に、図書館に対する子どもや保護者の意見が自由記述で載っている。例えば、「予約した本が、最寄りの市民センターに届くといい」、「図書館のイベントの開始時間が午前中で、幼稚園が終わってからだと行けないため、もう少し時間を遅くしてほしい」、「八幡西図書館の換気が悪い」とか、具体的で、すぐにでも改善できるようなものなどもある。このような意見は非常に参考になる。

委　員／　このアンケートが、これからの子ども図書館のコンセプトを考えるときにも、とても役立つのではないだろうかと思う。小さい子や小学生とか、どこを主に考えるのかというところも非常に重要である。また、お母さんたちのニーズや、子どものニーズを生かして作って欲しい。アンケート結果を読むと、本当にお母さん方が子ども図書館を熱望されていることがよく分かる。これを生かしていただきたい。お母さんの「子どもを連れて自分の本を借りに行けないので、お母さんのコーナーもあるといい」という意見など、とても参考になるかと思う。

議題：今後の子どもの読書活動の取組みについて（意見交換）

委　員／　「北九州市子ども読書活動推進条例」ができたということが、とても画期的で素晴らしいことだと思っている。ぜひこれを活かして、子どもの読書活動を進めていかなければならないと思っている。特に、子ども図書館を設置し、学校図書館支援センターを作る計画について大変期待している。平成 14 年度のころ、6 年間にわたり、文部科学省の指定を受け、学校図書館資源共有型モデル地域事業を行ったが、その後発展しなかったというのは、それを中心にやる支援センターがなく、教育委員会で細々とやっていたためだが、今度、子ども図書館が設置されれば、その支援センターをうまく活用しながら、子ども読書活動を進めていけたらと考えている。

委　員／　保護者の立場から見ると、やはり子どもの読書は、親の姿に影響されると思う。親が熱心で読書が好きな場合、その子どもは、やはりよく本を読んでいると感じる。アンケート結果を見ると、保護者の意識は高いようだが、実際は、呼びかけてもしない方が多くいる。親が読まないと子どもも読まず、よく読む家庭と読まない家庭との温度差が、激しくあるように感じている。

「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」について、私たちＰＴＡ協議会としてものぼりを作ったり、冊子を配ったり等で、周知はしているものの、実際にほとんど浸透していないというのを感じている。もう少し保護者の意識を私たち自身が上げていかないといけない。まず親の背中を見せて、子どもたちに読書を促せるような家庭にするために、企画等を呼び掛けていきたい。

習慣がない子からすると、「本を読みなさい」というのは、押しつけのように聞こえていると思う。全く読書の習慣がない子たちに「読書しないと」と言ったら、「勉強しなさい」と言われているのと同じ感覚で受け取っているのではないか。

私は、個人的にビブリオバトル普及委員会活動をしており、その中で読書というものを遊びに変え、もともとの読書の楽しさを分かってもらおうとしている。

今後も、子どもたちだけに限らず、親も一緒に巻き込み、押しつけるのではなく、読書は楽しいんだという意識を持てるような環境づくりをしていきたい。

委　員／　私は、平成 18 年から年２回、北九州市内で「旅する絵本カーニバル」を開催している。「絵本をたのしみ、絵本で愛をつなぐ」ということをコンセプトに、そこに絵本があるから手に取って読むという、楽しい空間をつくっている。いつも来場者にアンケートを採っているが、ほぼこのアンケートと同じような回答をいただいている。ぜひこの意見を皆で考え、より良い子ども図書館をつくっていただきたい。

委　員／　私は、区内のそれぞれの小学校にある読み聞かせの会の会員たちが持っている悩みや、取組みを共有できる場として立ち上げた区小学校読書ボランティア連絡会という会を担っている。

その中で、いつも課題にあがるのは、ボランティアとして、学校の現場を借りて活動している立場上、読書活動に対して理解のない校長先生や、ＰＴＡが壁となり、スムーズに活動できないことがあるということだ。絵本に関して興味がある校長先生がいる学校はうまくいっているという声をたくさん聞く。

そのほか、月に１度図書館でおはなし会を行っている。参加は０歳児がほとんどであるが、小さい時から本になじんでいると、０歳でも真剣に、黙って、騒がずに聞いてくれる。これを見るとやはり、ブックスタートというものがすごく意味があることだなと思う。

委　員／　「北九州市子ども読書活動推進条例」の１０条、学校図書館支援センター事業の中で、「子どもの読書活動の推進における関係団体との連携に関する事業」がある。この中で、先ほど言った北九州市立図書館協議会、読書活動推進会議、北九州市立学校図書館協議会などとどう連携させていくか、どういうふうに組み合わせていくか。そして、いろいろな情報を周知させていくか、などが課題ではないか。

委　員／　ＰＴＡとボランティアの方の問題については、できる限りＰＴＡ協議会でも話をしてみる。

委　員／　「読書で学び、読書で遊び、読書で感動」をキャッチフレーズに、０歳から大人までを対象に、読書の大切さと楽しさを届ける活動を 20 年余りしている。

立ち上げて 20 年になるが、北九州は読書環境の整備がかなり前進したと思う。

今後は、図書館、図書室や、本と人をつなぐアプローチの方法に取り組んでいかなくてはいけないと思う。全く読まない、読書に興味・関心がないお子さんや保護者に、どう読書習慣を手渡していくのか。読書をなかなかしない子どもや保護者へどういうアプローチをしていくか。新しいアプローチの方法を考えていく必要があると思う。いい事業がたくさんあるので、このまま一気に、読書好きな子ども日本一にいければいいと思う。

委　員／　絵本カーニバルでは、子どもだけではなく、子どもから大人、大人から高齢者までを対象としている。来場者の中で、高齢者と中年以降の男性が、絵本を見ることによって子ども返りすることに驚いている。地べたにあぐらをかき、何時間も絵本を読み、本当に子ども返りされている。子どもにとっても、絵本に会うとお父さんもこんな感じになるんだと距離が近づくみたいな感じがした。

委　員／　読み聞かせは、各学校で、どなたもやりやすい方法として行っているが、読み聞かせや絵本より先のことになったときに、どういう方法があるのか。それができる人材をもっと増やさないといけない。

委　員／　生涯学習コーディネーターとして、直接地域の小学生たちとふれあっているので、郷土愛の醸成につながる読書の推進等に関して、すごく責任があると思って

いる。

地域の学校との連携に関して、毎月 23 日の「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」に、学校のブックヘルパーとして、昼休みに図書館に来てくれる子どもたちに対して、何か企画をしようということで、大小いろいろイベントを考えて、今まで実行してきた。しかし、実際、学校が開いている日にこの 23 日がある月が少なく、学校でイベントができるのは、２、３回くらいしかないので、コーディネーターと連携し、市民センターで何かイベントを行っている。

子どもたちに「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」に何をしたらいいのかということをきちんと提示してあげないと、なかなか浸透していかないのではないかと思っている。夏休みに配られる「早寝・早起き・朝ごはん・読書カード」で紹介されている「家読」などをこの日に合わせてしている。学校、地域、図書館、市民センターなど、いろいろな場所で継続してできるように、何かしていければいいと思っている。

「読書」と言ったら、「勉強しなさい」と同じ感じになるが、大人が大きくとらえ、言葉を育むとか、地域を愛するとか、もっとゆったりした大きなものと考えてあげたらいいのかと思う。

委　員／　日頃、中学生・高校生と接する機会が多いことと自分の経験から感じていることが３点ある。第１点目、自分が、小学校で担任をしていた時に、朝の１０分間読書の時間を、やらされているという取組みではなく、クラスのみんなで読み聞かせの時間に変え、読書活動をプラスに変えた。この時、家読ではなくて、学級の先生と生徒が１つの本を通してどう感じるかという活動をすると、子どもたちが本を手に取る回数が非常に増えた。中学校で取り組んでみてはどうか。

第２点目、今の中学生・高校生は図書館を「本を読むところ」ではなく、「学習スペース」としか捉えていないところが、非常に残念である。

３点目、中学生・高校生たちに好きな本を尋ねると、「漫画」と答える。大人である自分も、漫画からも学ぶことが非常に多いと思っている。クールジャパンの政策にも掲がっているが、非常に文化的に質の高い漫画も存在するということを、大人にも知ってもらいたい。子どもは漫画を通して古文や漢文を学んだりしている。ぜひ子ども図書館を進めるに当たって、漫画の本もお願いしたい。

委　員／　幼稚園で図書館と付き合うことよりも、やはり親子で図書館と付き合うことが、幼児期には一番合っているのかと思っている。特に幼児期は保護者へのアプローチということがとても重要だと思う。

また、本日、自分がとても反省していることがある。今は園長会などの集りでは、こういう話題はあまり出てこない。市の取組みを各園の園長先生がもう少し知っておき、そのことに対して、具体的に園長が自ら保護者に働き掛けられるような、意識改革や、そういうことを啓発していくということがとても大事だということを、会議に参加して感じた。

市からの啓発物等についても、本来なら、市と保護者のパイプ役にならないといけないところを、ただ渡すだけであったと痛切に感じた。

「読まないといけないもの」ではなく、楽しい読書ということを、子どもたちが感じる基礎は、やはり幼児期にお母さんやお父さんと一緒に楽しんで絵本を開けるというところから始まると思うので、０歳～６歳までの環境づくりというのが非常に大切なのではないかと思う。

これを課題としてとらえ、心をあらためて協力していきたい。

委　員／　私からは、知的の特別支援学校でどのような読書活動をしているかということなどを紹介する。まず、学校には教室数に限りがあるため、独自の図書室はなく、図書室、パソコン室、視聴覚室を兼用している。しかし、読書活動をやっていないかというと、そうではなく、子どもたちの実態に合わせて、読書活動をしている。

１人で本を読むということはなかなかできないため、読み聞かせが中心となる。子どもたちはどうしても耳からの情報だけで理解するのは難しいが、目からの視覚的な情報があると非常によく理解できるので、大型絵本とか紙芝居といったものを活用している。

ただ、学校の中だけでの取組みでは不十分なため、夏の教室等で、読み聞かせのボランティアの方に来ていただいたり、高等部は校外学習を利用して、八幡西図書館や、学研都市にある北九大の図書館を利用するなどしたり、あらゆる所と連携しながら活動している。

子ども図書館が設置されれば、学校としてはまた選択の余地が増えることとなり、うれしく思っている。

委　員／　日頃、図書館司書等を目指す大学生と接し、本日、皆さんのご意見をいただいた中で、幼い時からの読書活動とがすごく大事だということを改めて思った。

子ども図書館の設置については、規模や数などが明確に分からないが、子どもたちの読書活動を推進する上では、子どもが徒歩や自転車で行ける範囲の中に設置されるのが理想的ではないかと考える。１㎞くらいの半径の中で、図書館ではないが、それぞれの地域には市民センターや公民館がある。大阪では「まちライブラリー」など、それぞれの地域、まちおこしのような形で、読書活動を推進するというような動きがある。できれば、やはり子どもが行ける範囲に、図書館が設置されることが理想的なのではないかと考えている。

また、読書活動について話しをしているが、その読書活動をすることによって「何が得られるのか」ということを子どもたちに明示していないと思う。保護者も、読書活動をすることによって、「何が子どもたちに得るものがあるのか」ということを理解しなければ、なかなかそれを推進することはできないと思う。

特に、中学生、高校生になると、それが顕著に現れる。自我が芽生えてくるため、なぜ読書をしなければいけないのか、通読ではなく、自分の必要なこと、調べたいことに図書を利用するというふうに本の利用形態が変わっていく。

性差の問題もある。どちらかと言えば、女子のほうが、読書傾向が強く、男子は通読する傾向は多分少ないと思う。何か興味を持ったことに対して、本を使うというほうが利用率は高いと思うので、そこをもう少しアンケート等で調べると、子ども図書館のあり方やそれぞれのコーナー・ブースの設置方法なども変わってくるのではないかと思う。

学校司書の配置についても、子どもたちにとって、ただ、常にいる人がいるというだけでは駄目で、常にいる人が、自分の在学中にずっといて話を聞いてくれるということが一番大事だと思う。それは、やはり人が変わるということで、子どもは不信感を抱く。それが読書傾向に結び付かないということになっていくと思う。読書傾向に結び付くというのは、図書館にいる人と子どもたちの間に信頼関係、安心の中から生まれてくるものであると思うので、人的配置についても協議をしていただきたい。

委　員／　現在、これといって評価の基準はないということであったが、例えば、95%以

上だったら「達成した」、80％以上だったら「もう少し」などの、基準をきちんと置き、誰もが納得する形で評価するべきだと考える。

ブックスタートの配布率 70％は少ない。多い所は、98％や 99％の配布率がある。北九州市では集団検診が行われていないことなどの要因があると思うが、ブックスタートについて言えば、保健福祉、子育て、ボランティア、図書館など、いろいろな部署が連携することによって、初めて配布率が上がってくる仕組みのものだと思う。図書館だけというのではなく、様々な部署がしっかり関わり、もう一度見直していただきたい。

それに関連して、子どもの読書活動の推進というものは、子どもたちが関わっている全ての部署、いろいろな団体や、行政の中でのいろいろな部署が連携し、縦割りではなく、横につながって初めて前に進める活動だと思う。ぜひ連携の仕組みをきちんとつくっていっていただきたい。この読書プランにもそういう部分を反映させていただきたい。

それから、人の予算を付けるのがとても難しいことは百も承知だが、学校図書館司書についても、鍵が掛かっていない学校図書館をつくるという姿勢で、司書の配置をぜひ進めていただきたい。一朝一夕にできるものではないことは承知しているが、年次計画で少しずつでも人を増やして、きちんと配置していくということをやっていただきたい。

もう１つ、図書館というのは、建物と資料と人でできている。建物と資料の話はいろいろ出たが、人の話が出てこない。ぜひ、コーディネートができるような専門的な司書をそこに配置していただきたい。そして、子ども図書館が中核となり、市内全域のいろいろな所と連携しながら子ども読書活動を推進していく、そういう人材の配置をぜひお願いしたい。

委　員／　読み聞かせボランティアやブックヘルパーは、かなりの数の方が登録されている。その方たちを、司書の養成講座の中で養成し、活用していければいいと思う。協力していただく方法を考えているところである。